

一乗寺に遊ぶ（伊藤仁齋）

秋色蒼茫上翠微 雲交老樹雁初飛

山園柿熟鳥銜去 溪澗蕈稠人負歸

市遠不看塵漠漠 林深只見霧霏霏

欲尋他日棲身處 比叡山前野水磯

秋色 蒼茫 翠微に 上り

雲は 老樹に 交わり 雁 初めて 飛ぶ

山園 柿 熟し 鳥 銜んで 去り

溪澗 蕈 稠く 人 負うて 帰る

市 遠ければ 看ず 塵の 漠々 たるを

林 深ければ 只 見る 霧の 霏々たるを

尋ねんと 欲す 他日 身を 棲ましむる 処

比叡 山前 野水の 磯

解説 仁齋七十一歳の作ということになる。詩は京都一乗寺村より望む山色、村の風情、山家の閑寂なるたたずまい等を詠じている。

語釈 ※一乗寺 京都市乗寺町。 ※蒼茫 青々として広大なさま。 ※翠微 ここでは瓜生山の中腹。 ※山園 山家の庭。 \*銜 口に含む。 ※溪澗 溪流 ※蕈 茸。きのこ。 ※漠漠 広々として遙かなさま。 ※霏霏 深く立ち込めているさま。 ※野水磯 河原。

通釈 一乗寺の瓜生山を望めば、蒼く広く、秋の気配もたけなわである。さらに上方を仰げば、老樹に雲が垂れ、今年、初めて見る雁が飛んでくる。山家の庭には柿が赤く熟れ、口に含んでいた鳥が飛び去る羽音が、静寂を破って聞こえる。溪流の地であるので、茸であろうか、それを背中の籠に入れて帰る村人達。その香が鼻孔を突く。この村は、町から遠く隔っている。車馬や人のあがる塵や埃はなく、清浄そのものであり、なお林が深いため、見えるのは、厚くたなびく霧だけである。将来、隠棲の地を探すとしたならば、比叡の山、この一乗寺村の清澄な水をたたえた河原である。